

アジア系留学生の専門的ヘルパー, 役割的ヘルパー, ボランティアヘルパーに対する被援助志向性と社会・心理学的変数の関連³

水野 治久¹ 石隈 利紀²

アジア系留学生の専門的ヘルパー, 役割的ヘルパー, ボランティアヘルパーに対する被援助志向性に関連する社会・心理学的変数を抽出するために, 質問紙調査が実施された。国立大学に在籍する韓国, 中国, 台湾のアジア系在日留学生を対象に調査を行い, 257票の質問紙が回収された。専門的ヘルパーとして留学生担当教官, 役割的ヘルパーとして日本語教師, 指導教官, ボランティアヘルパーとして同国人留学生, 日本人学生が設定され, 学習・研究, 健康, 対人関係, 住居・経済, 情緒領域の被援助志向性が尋ねられた。分析の結果, 同国人留学生の一部の領域を除き, 被援助志向性と呼应性への心配, サポートの量との関連が認められた。またいくつかのヘルパーでは, 性差や自尊感情, 日本語能力等との関連が認められた。自尊感情では, 被援助志向性と正の関連が認められた。このような結果から, ヘルパーや領域によっては, 性差や自尊感情などを考慮する必要があるが, サポートを積極的に供給すること, 呼应性への心配を低くする介入で, 被援助志向性を高められる可能性が示唆された。

キーワード: 被援助志向性, ヘルパー, 留学生, ヘルパーの呼应性への心配, 自尊感情

留学生受け入れに伴い, 国立大学を中心に留学生を担当する教官が配置され, 留学生相談室などで相談・援助活動が実施されている。しかしながら, 留学生相談室への来談状況を調査した松原・石隈(1993)は, 人間関係や文化の問題を相談する留学生が少なかったことから, 留学生は心理的な問題を日本人カウンセラーやアドバイザーに相談することに抵抗があるかも知れないと指摘している。

留学生が誰に援助を求めるかという問題は「被援助志向性」と呼ばれている。被援助志向性は米国を中心に1970年代から様々な人々を対象に調査が積み上げられ, 現在までに①デモグラフィック要因, ②ネットワーク変数, ③パーソナリティ変数, ④個人の問題の深刻さ, 症状との関連が指摘されている(水野・石隈, 1999)。

まず, ①デモグラフィック要因については, 男性よりも女性の方が高い被援助志向性を示すこと(Fischer & Farina, 1995; Rickwood & Braithwaite, 1994), 若者と高齢者の被援助志向性が低く(Leaf et al., 1987), 高い学歴や収入が被援助志向性と正の関連を示すこと(Tijhuis et al., 1990)が明らかになっている。次に, ②ネットワーク変数においては, 家族からのサポート得点の低い人

(Goodman et al., 1984)や事前に心理学の専門家からの援助経験のある人(Halgin et al., 1987)が高い被援助志向性を示すことが明らかになっている。更に, ③パーソナリティ変数では自尊感情の低さ(Gross et al., 1979)やメンタルヘルスサービスに自己開示する人(Tijhuis et al., 1990)は援助を求めやすいという指摘がある。最後に, ④個人の問題の深刻さ, 症状も, 被援助志向性と正の関連がある(Phillips & Murrell, 1994; Rickwood & Braithwaite, 1994)。

このような変数の他に, 援助に対する意識を「治療不安(treatment fearfulness)」という観点から捉え, この不安の高い人は治療を回避する傾向があることを指摘した研究がある。治療不安には, ①セラピストとの関係やセラピストの能力に関連する「セラピストの呼应性(therapist responsiveness)」, ②カウンセリングを受けることで, 自分や他者からどのように見られるかを心配する「イメージへの心配(image concerns)」(Pipes et al., 1985), ③治療の中でクライアントの意志に反して考えさせられたり, 発言させられることへの不安である「強要への心配(coercion concerns)」(Kushner & Sher, 1989), ④治療を受けていることで職場の上司, 友人, 家族から汚名を着せられることへの不安である「汚名への心配(stigma concerns)」(Deane & Chamberlain, 1994)の4つの因子が見出されている。それぞれの研究者により, 治療回避群の治療不安得点が高いことが明らかにされている。

¹ 一橋大学法学研究科 〒186-8601 東京都国立市中2-1
e-mail: MIZUNO.Haruhisa@srv.cc.hit-u.ac.jp

² 筑波大学心理学系

³ 本研究は, 平成11年度文部省科学研究費奨励研究(A)(課題番号 10710041)の助成を受けた。

水野・石隈 (2000) は、アジア系留学生を対象に、専門的ヘルパーに対する被援助志向性に影響を与える変数を調べた。その結果、各領域で若干の違いはあったものの、ヘルパーの応答性に対する心配と被援助志向性は負の関連、ソーシャルサポートと被援助志向性は正の関連が認められた。この研究においては留学生担当教官に焦点をあてて検討したが、留学生の援助システムを検討する上では、指導教官や日本語教師、同国人留学生、日本人学生からの援助も視野に入れる必要がある。

また、社会心理学の援助要請の研究では、主に実験研究から、援助要請と自尊感情との関連が指摘されている(西川, 1998)。Nadler (1998) は、援助要請に関する研究をレビューし、自尊心脅威モデルの媒介変数として被援助者の自尊感情が指摘されているとしている。これには、①自尊感情の低い人は援助を求めることで、更に傷つくことを恐れて援助を求めないとする「傷つきやすさ仮説」、②自尊感情の高い人が、他者に援助を求めることは、現在の自己が持っている高い自己認知との一貫性がなくなるので、援助を求めないとする「認知的一貫性仮説」の2つの仮説がある。

このようなことから、本研究は、水野・石隈 (2000) の研究成果を更に発展させ、①留学生を取り巻く様々なヘルパーに対する被援助志向性に関連のある変数を抽出すること、②自尊感情と被援助志向性の関連を検討することを目的とする。

これにより、留学生を取り巻く様々なヘルパーに対する被援助志向性に関連する変数が抽出でき、留学生がスムーズにヘルパーから援助を受けられるようにするにはどうすれば良いのかという実践的な意義、また、広義の援助行動について主に実験的なアプローチから研究している社会心理学の研究成果 (Nadler, 1998; 西川, 1998) との統合の試みという理論的な意義がある。

方 法

1. 調査対象

調査対象は関東甲信越地区、東海地区、中国地区の国立大学の社会科学系学部在籍する、中国、台湾、韓国の留学生423名であった。調査対象の留学生を中国、台湾、韓国の3カ国に限定したのは、我が国における留学生の74%程度(文部省学術国際局留学生課, 1999)がこの3カ国からの留学生であり、この3カ国の留学生を検討することで、留学生援助の基礎資料を蓄積できると考えたからである。

調査期間は1999年10月12日～12月10日で、質問紙は

郵送や留学生個人用メールボックスを利用し配布され、所属学部、研究科全員に行き渡るようにした。291票を回収し、記入漏れがある34票は無効票とし、最終的に257票を有効回答とした。有効回答率は60.8%である。質問紙は日本語で作成され、韓国語と中国語に翻訳された。翻訳の適切さはバックトランスレーションにより確かめられた。対象者の属性はTABLE 1のとおりである。

TABLE 1 対象者のデモグラフィック要因

性別	男性 141名(54.9%)	女性 116名(45.1%)
平均年齢	28.335歳(標準偏差 5.438)	
出身国	韓国 55名(21.4%)	中国 165名(64.2%)
	台湾 37名(14.4%)	
大学での所属	学部 82名(31.9%)	大学院研究生 47名(18.3%)
	大学院修士課程 76名(29.6%)	大学院博士課程 52名(20.2%)
滞在期間	1年未満 39名(15.2%)	
	1年以上2年未満 43名(16.7%)	
	2年以上3年未満 49名(19.1%)	
	3年以上4年未満 31名(12.1%)	
	4年以上5年未満 24名(9.3%)	
	5年以上6年未満 24名(9.3%)	
	6年以上7年未満 15名(5.8%)	
	7年以上 32名(12.5%)	
日本語能力	初級 4名(1.6%)	初級の上 28名(10.9%)
	中級 23名(8.9%)	中級の上 130名(50.6%)
	上級 72名(28.0%)	
結婚の有無	未婚 170名(66.1%)	既婚 87名(33.9%)
未婚か既婚でも配偶者と同居していない人	188名(73.2%)	
既婚でかつ配偶者と同居	69名(26.8%)	

2. 測度

1) 被援助志向性

被援助志向性は、水野・石隈 (2000) にならい「留学生が援助をどの程度求めるかという認知的枠組み」と定義した。

ヘルパーは、石隈 (1996) の分類を留学生を取り巻くヘルパーにあてはめ、①援助サービスを日常の仕事の中心としている「専門的ヘルパー」として、「留学生担当教官(留学生センター生活指導部門教官・留学生専門教育教官)」、②役割のひとつあるいは一側面として援助サービスを行う「役割的ヘルパー」として、「日本語教師」、「指導教官」、③職業や家族という役割と関係なく援助的機能を持つ「ボランティアヘルパー」として、「同国人留学生」、「日本人学生」を設定した。設定したサポート領域で問題が認められた場合、各ヘルパーに援助を求めるかどうかを5件法(1.全くあてはまらない<1点>～5.非常によくあてはまる<5点>)で尋ねた。

サポート領域については浦 (1999) を参考に、道具的サポートと社会情緒的サポートの2つの種類を設定した。本研究では、道具的サポート領域として、学習・研究、健康、対人関係、住居・経済を、社会情緒的サ

ポート領域として情緒を設定した。

なお、各領域のサポートの内容を特定するために領域毎に問題状況を示し質問した (TABLE 2 参照)。

TABLE 2 各領域の被援助志向性及びソーシャルサポートの問題状況

サポートの種類	領域	設定された問題状況
道具的サポート	学習・研究	履修の方法や勉強の内容、言葉の意味が理解できず、それを説明してほしいとき (説明してくれるようなサポート)
	健康	身体の調子が悪いときに、良い病院を紹介してくれたり、病気の知識や日本の医療の仕組みについて教えてほしいとき (教えてくれるようなサポート)
	対人関係	日本人 (指導教官, 日本人学生) との付き合い方の方法やコツを教えてほしいとき (教えてくれるようなサポート)
	住居・経済	留学生に対する奨学金, 住居, アルバイトの情報を教えてほしいとき (教えてくれるようなサポート)
社会情緒的サポート	情緒	留学生生活がうまくいかず落ち込んで元気がないときに、話を聞いて、精神的に支えてほしいとき (支えてくれるようなサポート)

注) ()内はソーシャルサポートを尋ねたときの質問文

2) ソーシャルサポート

各ヘルパーから過去1年以内に、もらったサポートを尋ねた。サポートは5件法 (1.全くもらいませんでした<1点>~5.非常にたくさんもらいました<5点>) で尋ねた。

各領域のサポートの内容を特定するために領域毎に問題状況を示し質問した。この問題状況は TABLE 2 の被援助志向性と同じ内容を設定し、問題文については、ソーシャルサポートを表すように変更を加えた。変更を加えた問題文は TABLE 2 の設定された問題状況の括弧内に示したとおりである。

3) 援助不安

留学生担当教官, 日本語教師, 指導教官, 同国人留学生, 日本人学生に対して援助を求めるときに持つ主観的な不安を測定することにした。

質問項目は, Deane & Chamberlain (1994), Kushner & Sher (1989), Pipes et al. (1985) 及び水野・石隈 (2000) を参考に, 心理学系研究者3名で, 在日留学生の生活及び相談の状況を考慮し検討した。水野・石隈 (2000) では「イメージへの心配」, 「汚名への心配」は回答の分布の偏りがあると判断され, 「セラピストの応答性」に関する項目のみで分析された。しかしながら, 留学生は汚名に関連する心配で来談しないという指摘もある (松原, 1998)。このようなことから「汚名への心配」に関わる項目も留学生の援助不安を構成する因子として妥当であると考え, 「私が相談したら, 先生やその周

囲の人から, 『能力の低い学生だ』と思われるだろう」などの項目から構成される「汚名」3項目, 「留学生の問題を理解してくれないだろう」, 「相談したことを解決できないだろう」などの項目から構成される「応答性」5項目, 計8項目の援助不安尺度を5種類のヘルパーに対して作成した。作成された尺度項目について, 5件法 (1.全くあてはまらない<1点>~5.非常によくあてはまる<5点>) で質問した。得点が高いほど不安が高いことを示す。

4) 自尊感情

自尊感情 (self-esteem) は, Rosenberg (1965) の自尊感情尺度を星野 (1970) が翻訳したものを河村 (1999) が改良した尺度を使用した。この尺度は「物事を人並み (人と同じくらい) には, うまくやれる」, 「自分は全くダメな人間だと思ふことがある (逆転項目)」等の10項目が使用され, 5件法 (1.全くあてはまらない<1点>~5.非常によくあてはまる<5点>) で質問された。得点が高いほど自尊感情が高いことを示す。

5) 基本的属性

基本的属性として, 性別, 年齢, 日本における滞在期間, 日本語能力, 婚姻及び配偶者との同居の有無が測定された。性別は男性に0点, 女性に1点を与えた (平均値.451; 標準偏差.499)。婚姻及び配偶者との同居の有無については, 未婚か既婚でも現在配偶者と同居していない留学生に0点を与え, 既婚でかつ現在配偶者と同居している留学生に1点を与えた (平均値.269; 標準偏差.444)。年齢は19歳から46歳までのレンジを持っていた (平均値 28.335; 標準偏差 5.438)。日本での滞在期間は, 1年未満を1点とし, 14点 (13年) までのレンジであった (平均値 4.140; 標準偏差 2.670)。日本語能力は初級~上級の5段階の自己評定で尋ねた (平均値 3.926; 標準偏差 .972)。また, 各ヘルパーへの被援助志向性得点及び各ヘルパーからのソーシャルサポート得点の平均値と標準偏差は TABLE 3, 4 のとおりである。

結 果

まず, 援助不安と自尊感情の尺度項目について検討した結果について述べたい。各ヘルパーに対する援助不安尺度の「汚名への心配」に関わる項目については, 多くの項目で「全くあてはまらない」, 「あまりあてはまらない」に80%以上の回答が集中し, 回答の分布に偏りがあると判断された。そこで, 5項目からなる「応答性」に関する項目のみで分析することとした。各ヘルパーに対する応答性の心配に関わる項目について因子分析を行った。その結果, 各ヘルパーともに1因子

TABLE 3 各ヘルパー・領域の被援助志向性の平均値 (標準偏差)

	留学生担当教官	日本語教師	指導教官	同国人留学生	日本人学生
学習・研究領域	2.514 (1.320)	2.284 (1.219)	3.677 (1.118)	3.595 (1.121)	3.350 (1.112)
健康領域	2.763 (1.183)	1.996 (1.010)	2.058 (1.016)	3.529 (1.068)	2.724 (1.121)
対人関係領域	3.156 (1.250)	2.716 (1.254)	2.662 (1.195)	3.654 (.985)	3.183 (1.087)
住居・経済領域	3.160 (1.272)	2.078 (1.005)	2.366 (1.192)	3.646 (1.069)	2.401 (1.159)
情緒領域	2.817 (1.254)	2.191 (1.103)	2.599 (1.234)	3.821 (.996)	2.712 (1.133)

TABLE 4 各ヘルパー・領域のソーシャルサポートの平均値 (標準偏差)

	留学生担当教官	日本語教師	指導教官	同国人留学生	日本人学生
学習・研究領域	2.012 (1.147)	1.872 (1.091)	2.767 (1.225)	2.864 (1.228)	2.366 (1.075)
健康領域	1.405 (.800)	1.269 (.669)	1.401 (.856)	2.448 (1.141)	1.669 (.899)
対人関係領域	1.704 (1.018)	1.708 (.994)	1.926 (1.056)	2.716 (1.087)	2.105 (1.097)
住居・経済領域	1.809 (1.064)	1.284 (.685)	1.603 (1.003)	2.763 (1.241)	1.502 (.880)
情緒領域	1.615 (.937)	1.319 (.707)	1.833 (1.100)	3.117 (1.260)	1.938 (1.070)

構造が確認され、①留学生担当教官に対する呼応性の心配尺度 (5項目; $\alpha = .796$), ②日本語教師に対する呼応性の心配尺度 (4項目; $\alpha = .804$), ③指導教官に対する呼応性の心配尺度 (4項目; $\alpha = .856$), ④同国人留学生に対する呼応性の心配尺度 (5項目; $\alpha = .723$), ⑤日本人学生に対する呼応性の心配尺度 (4項目; $\alpha = .827$) が作成された。各尺度の合計得点の平均値は、①留学生担当教官が11.262 (標準偏差: 3.678), ②日本語教師が9.763 (標準偏差: 3.102), ③指導教官が9.778 (標準偏差: 3.353), ④同国人留学生が11.549 (標準偏差: 3.306), ⑤日本人学生が12.121 (標準偏差: 3.223) であった。各尺度の度数分布を見ると、回答者の3人に1人はニュートラル以上の不安である1項目あたり2.5点以上の数値を示し、この尺度を使う積極的な意味が認められたと判断した。

10項目の自尊感情尺度を因子分析で検討した結果、2因子が抽出されたが、「私は自分に満足している」と「自分には満足できるところがあまりない」の2項目は両因子に一定負荷を示したため、削除し、8項目で再び因子分析を実施した。その結果、2因子が抽出され、第1因子を“積極的自尊感情因子 ($\alpha = .728$)”, 第2因子を“消極的自尊感情因子 ($\alpha = .727$)”と命名した。

各領域の被援助志向性に関連のある変数を抽出することを目的に5つのヘルパー、5つの領域毎に重回帰分析を実施した。独立変数は、性差、年齢、日本での滞在期間、婚姻及び配偶者との同居の有無、日本語能力、自尊感情、各ヘルパーへの呼応性への心配、各領域のヘルパーからのサポート、従属変数は各ヘルパー、各領域に対する被援助志向性であった。

この独立変数は過去の研究において被援助志向性と

の関連が確認されているので変数の投入は同時に行った。なお、自尊感情尺度は第一因子と第二因子の相関が高く、多重共線性が疑われた。そこで、服部・海保 (1996) にならい、第一因子と第二因子の項目を合計した得点を算出し、独立変数に投入した。自尊感情尺度は尺度全体でも一定の内的整合性 ($\alpha = .772$) が認められた。尺度の合計得点の平均値は31.665 (標準偏差: 4.490) であった。

重回帰分析の説明率 (R^2) はいずれも有意であり、9.3%~43.2%の範囲で投入した独立変数で従属変数を説明できることがわかった。ここではその結果をヘルパー毎に検討していく (TABLE 5~9 参照)。

1. 留学生担当教官 学習・研究, 健康, 対人関係, 情緒領域は、被援助志向性と呼応性への心配は負の関連, サポートの量とは正の関連を示した。住居・経済領域については、被援助志向性と日本語能力, 呼応性への心配が負の関連, サポートの量とは正の関連を示した。

TABLE 5 留学生担当教官への被援助志向性を従属変数とした重回帰分析における各独立変数の標準偏回帰係数

独立変数	学習・研究	健康	対人関係	住居・経済	情緒
性差	-.028	.066	.047	-.004	.022
年齢	.025	.066	.100	.092	.153
滞在期間	.065	-.070	-.009	-.054	-.014
配偶者との同居	-.072	.038	-.055	-.110	-.005
日本語能力	-.100	.003	-.050	-.133*	-.062
自尊感情	.020	.030	.078	.025	.006
呼応性への心配	-.172**	-.180**	-.232**	-.184**	-.179**
留学生担当教官からのサポート	.417**	.220**	.298**	.331**	.417**
説明率 (R^2)	.239**	.093**	.176**	.191**	.237**

注) * $p < .05$ ** $p < .01$

TABLE 6 日本語教師への被援助志向性を従属変数とした重回帰分析における各独立変数の標準偏回帰係数

独立変数	学習・研究	健康	対人関係	住居・経済	情緒
性差	.018	.199**	.097	.024	.071
年齢	.052	.109	.092	.053	.084
滞在期間	.081	.027	.065	.078	.070
配偶者との同居	-.064	-.046	-.009	.039	.039
日本語能力	-.168**	-.064	-.072	-.074	-.118
自尊感情	.019	-.032	.047	.066	-.016
呼応性への心配	-.228**	-.260**	-.249**	-.151*	-.221**
日本語教師からのサポート	.367**	.280**	.330**	.292**	.352**
説明率 (R^2)	.249**	.191**	.218**	.129**	.209**

注) * $p < .05$ ** $p < .01$

TABLE 7 指導教官への被援助志向性を従属変数とした重回帰分析における各独立変数の標準偏回帰係数

独立変数	学習・研究	健康	対人関係	住居・経済	情緒
性差	.064	.086	.088	.000	.011
年齢	.142	.090	.023	.156*	.145*
滞在期間	.139*	.002	.055	.006	.150*
配偶者との同居	-.114	-.013	.094	-.080	.025
日本語能力	-.138*	-.028	-.117	-.087	-.122*
自尊感情	.116*	.082	.051	.048	-.010
呼応性への心配	-.167**	-.132*	-.178**	-.145*	-.217**
指導教官からのサポート	.312**	.477**	.400**	.428**	.417**
説明率(R ²)	.232**	.284**	.248**	.271**	.404**

注) *p<.05 **p<.01

TABLE 8 同国人留学生への被援助志向性を従属変数とした重回帰分析における各独立変数の標準偏回帰係数

独立変数	学習・研究	健康	対人関係	住居・経済	情緒
性差	.052	.060	.081	.118	.020
年齢	.118	.125	.119	.116	.118
滞在期間	.020	-.035	.019	-.010	.088
配偶者との同居	-.072	-.158*	-.015	-.033	-.101
日本語能力	-.062	-.097	-.058	.023	-.053
自尊感情	.119*	.179**	-.027	.047	.024
呼応性への心配	-.078	-.139*	-.077	-.119*	-.214**
同国人留学生からのサポート	.491**	.335**	.551**	.517**	.534**
説明率(R ²)	.285**	.210**	.331**	.308**	.409**

注) *p<.05 **p<.01

TABLE 9 日本人学生への被援助志向性を従属変数とした重回帰分析における各独立変数の標準偏回帰係数

独立変数	学習・研究	健康	対人関係	住居・経済	情緒
性差	.047	.127*	.125*	.068	.104*
年齢	.029	.201**	.032	.105	.099
滞在期間	.063	-.002	-.011	-.061	.027
配偶者との同居	-.078	-.151*	-.027	-.030	-.009
日本語能力	.059	.001	.089	-.041	.022
自尊感情	.047	.023	-.028	-.050	.018
呼応性への心配	-.152*	-.128*	-.224**	-.249**	-.188**
日本人学生からのサポート	.370**	.362**	.348**	.365**	.571**
説明率(R ²)	.200**	.187**	.241**	.227**	.432**

注) *p<.05 **p<.01

2. 日本語教師 学習・研究領域は、被援助志向性と日本語能力、呼応性への心配が負の関連、サポートの量は正の関連を示した。健康領域については、被援助志向性と性差の関連が確認され、女性の被援助志向性得点が高かった。他の変数では、被援助志向性と呼応

性への心配が負の関連、サポートの量は正の関連を示した。対人関係、住居・経済、情緒領域については、被援助志向性と呼応性への心配が負の関連、サポートの量は正の関連を示した。

3. 指導教官 学習・研究領域は、被援助志向性と滞在期間、自尊感情、サポートの量が正の関連、日本語能力、呼応性への心配が負の関連を示した。健康、対人関係領域については、被援助志向性とサポートの量が正の関連、呼応性への心配が負の関連を示した。住居・経済領域については、被援助志向性と呼応性への心配が負の関連、年齢、サポートの量が正の関連を示した。情緒領域については、被援助志向性と年齢、滞在期間、サポートの量が正の関連、日本語能力、呼応性への心配が負の関連を示した。

4. 同国人留学生 学習・研究領域については、被援助志向性と自尊感情、サポートの量が正の関連を示した。健康領域については、被援助志向性と配偶者との同居が関連を示し、未婚か既婚でも配偶者と同居していない留学生の被援助志向性得点が高かった。他の変数では、被援助志向性と自尊感情、サポートの量が正の関連、呼応性への心配が負の関連を示した。対人関係領域では、被援助志向性とサポートの量のみが正の関連を示し、他の変数との関連は見られなかった。住居・経済、情緒領域については援助志向性と呼応性への心配が負の関連、サポートの量は正の関連を示した。

5. 日本人学生 学習・研究、住居・経済領域では、被援助志向性と呼応性への心配が負の相関、サポートの量は正の関連を示した。健康領域については、性差との関連が確認され、女性の被援助志向性得点が高かった。また、配偶者との同居も関連を示し、未婚か既婚でも配偶者と同居していない留学生の被援助志向性得点が高かった。他の変数では、被援助志向性と年齢、サポートの量が正の関連、呼応性への心配が負の関連を示した。対人関係領域については、性差との関連が確認され、女性の被援助志向性得点が高かった。他の変数では、呼応性への心配が負の関連、サポートの量は正の関連を示した。情緒領域については、性差との関連が確認され、女性であることが被援助志向性と関連があった。他の独立変数では、呼応性への心配が負の関連、サポートの量は正の関連を示した。

考 察

援助不安尺度については、「汚名」に関わる項目は回答の分布に偏りが認められたため、採用されなかった。このことは、留学生の援助不安にはヘルパーの呼応性

に関する項目のみが関連している可能性を示すものである。これは、留学生の相談には問題解決的なものが多いこととの関連が推測される。しかし、援助不安は被援助志向性と関連する変数として重要な変数であるので、今後は、援助不安だけを重点的に検討する必要がある。

5つのヘルパーへの被援助志向性得点を従属変数にした重回帰分析の結果、同国人留学生の一部の領域を除き、被援助志向性と呼应性への心配、ソーシャルサポートとの関連が認められた。呼应性への心配の標準偏回帰係数は-.119から-.249と幅があった。ソーシャルサポートは、留学生担当教官の健康、対人関係領域、日本語教師の健康、住居・経済領域を除いて、.3以上の標準偏回帰係数が認められ、サポートの量の方が、予測力が高いことが示唆された。このことは、まず、ソーシャルサポートを積極的に供給し、次に呼应性への心配を低くする介入で、被援助志向性を高められる可能性を示すものである。この2つの変数以外で各ヘルパーの被援助志向性に関連のあった変数の標準偏回帰係数はすべて、.3以下である。その関連は、限定的であることをここで指摘した上で、以下に考察したい。

①専門的ヘルパーである留学生担当教官の住居・経済領域では、日本語能力の低い留学生の被援助志向性得点が高かった。日本語能力が低い留学生は、住居やアルバイトの情報を自分で入手することは困難だと感じているので、留学生担当教官に援助を求めるのかも知れない。

②役割的ヘルパーである日本語教師の学習・研究領域では、日本語能力の低い留学生の被援助志向性得点が高かった。これは本人の援助ニーズの高さを反映していると言える。

③役割的ヘルパーである指導教官の学習・研究領域では、滞在期間の長い留学生、日本語能力が低い留学生、自尊感情の高い留学生の被援助志向性得点が高かった。滞在期間の長い留学生は、指導教官との人間関係が深まっているので、援助を求めやすいのではないかと考えられる。日本語能力が低い留学生は、学習や研究での具体的なサポートの必要性があり、それが高い被援助志向性につながっている可能性がある。自尊感情と被援助志向性は正の関連を示し、傷つきやすさ仮説を支持した。指導教官に、勉強のことで援助を求めるのは、自尊感情の低い留学生にとっては脅威的であるのかも知れない。

④ボランティアヘルパーである同国人留学生の学習・研究、対人関係領域では呼应性への心配との関連

は認められず、サポートの量のみと正の関連が認められた。勉強や日本人との対人関係の問題は、留学生であれば誰もが同じような経験をするので、相談相手の呼应性が気にならないのであろうか。また、学習・研究領域では、自尊感情の高い留学生の被援助志向性得点が高く、傷つきやすさ仮説を支持した。勉強の問題で同国人留学生に援助を求めることは、自尊感情の低い留学生にとっては、脅威的である可能性がある。社会心理学の援助要請の研究においても、類似性の高い他者に援助を求めることは、援助を求めた相手より自分が劣っていることを自ら認めることになるので、自己への大きな脅威となるという指摘がある(西川, 1998)。今後はこうした観点からも検討されるべきである。

一方で、健康領域では、未婚か既婚でも配偶者と同居をしていない留学生、自尊感情の高い留学生の被援助志向性得点が高かった。未婚か既婚でも配偶者と同居をしていない留学生は、健康面での道具的サポートを提供する人がいないので、同国人留学生への被援助志向性得点が高くなったと想像できる。また、ここでも自尊感情と被援助志向性は正の関連が確認され、傷つきやすさ仮説を支持した。しかし、この領域は、健康領域の情報提供が中心的な援助であるので、この領域の援助のどの部分が、自尊感情の低い留学生に対して脅威的になったのかは、考察する材料を持たない。今後の課題としたい。

⑤ボランティアヘルパーである日本人学生では、健康、対人関係、情緒領域で女性の被援助志向性得点が高かった。この結果は従来の被援助志向性の結果を支持するものであった(水野・石隈, 1999)。

以上、ヘルパー毎に関連する変数を考察してみた。役割的ヘルパーである指導教官や日本語教師の一部の領域では滞在期間や日本語能力と被援助志向性の関連が認められた。滞在期間が長い留学生の被援助志向性が高かったのは、ヘルパーと留学生の人間関係の深まりを意味し、日本語能力が低い留学生の被援助志向性が高かったのは、留学生自身の援助ニーズの高さを意味している。この結果は、被援助志向性には、ヘルパーとの人間関係による援助の求め易さや被援助者の援助ニーズに関する変数が関連している可能性を示すものである。本研究は個人の特性に関する変数を検討したものであったが、こうした援助者と被援助者の人間関係の質や援助ニーズといった状況的要因についても検討する必要性を示すものである。

また、各ヘルパーに対する被援助志向性に関する重

回帰分析の独立変数の説明率 (R^2) は各領域ともに.093～.432と幅があった。これは、ヘルパーや領域によって、被援助志向性の構造が異なることを意味する。今後は、被援助志向性の構造をヘルパー、領域毎に、細かく検討する必要がある。

次に、この研究の基礎になった水野・石隈 (2000) の研究と今回の調査結果を比較してみたい。水野・石隈 (2000) の研究においても、一部の領域を除いてソーシャルサポートと呼応性への心配が被援助志向性と関連していた。この結果は、この2つの変数が、ヘルパーや領域を越えて、援助を求める時に関連のある変数として考えることができる。

最後に、留学生を援助するにはどのような点に留意すれば良いのか考えてみたい。まず、①被援助志向性を高めることを意識した援助方法の開発の必要性がある。一部の例外を除いて、被援助志向性にはソーシャルサポートとヘルパーの呼応性への心配が関連していた。留学生の被援助志向性を高めるためには、サポートを供給する試みと同時に、呼応性にも配慮する必要がある。この例として、留学生の入学時のオリエンテーションで、留学生を取り巻く援助資源についてガイダンスすることなどが考えられる。

しかし、ソーシャルサポートと被援助志向性の関連は循環的である。サポートを受けた留学生が被援助志向性を高め、それが留学生自身のサポート利用を促進し、更に高い被援助志向性へと結びつく。逆に、被援助志向性の低い留学生はサポートを得ることができないので、被援助志向性を高める機会がない。

このように考えると、被援助志向性を高めることを意識した援助方法だけでなく、②各個人の被援助志向性を尊重した援助方法も開発されるべきである。調査結果では、留学生の被援助志向性はヘルパーや領域によって異なっていた。これは、ヘルパーや領域により留学生の相談の持ち込み方が異なることを示している。留学生が持っている被援助志向性の特徴を積極的に活用し、それぞれのヘルパーが自分の得意分野を生かしながら援助を行う体制づくりが不可欠である。その例として、指導教官に学習・研究面で援助を求めることに脅威を感じる留学生が、学習面で相談に乗れる留学生担当教官に相談できるようなシステムを作ることが考えられる。

今後の課題

本研究の課題として、以下の3点を指摘したい。

①この研究で実施した質問紙調査では、39.2%の留

学生が回答しなかったり、回答しても無効回答であった。質問紙を回答しなかった留学生の動向そのものが、被援助志向性と関連している可能性があるため、調査結果も限定的に捉えられなければならない。

次に、②自尊心と被援助志向性の関連については、社会心理学においては、自尊心の高い人が援助を求めない認知的一貫性仮説が支持されることが多いとの指摘がある (Nadler, 1998)。今回の調査で、なぜ傷つきやすさ仮説が支持されたのかについて、自尊心と被援助志向性の関連に絞って、検討する必要がある。

最後に、③今回の調査は、中国、台湾、韓国の留学生を対象に実施した調査であった。今後はこれ以外の国や地域出身の留学生の被援助志向性にも注目し調査し、被援助志向性の構造を明らかにしていく必要がある。

引用文献

- Deane, F.P., & Chamberlain, K. 1994 Treatment fearfulness and distress as predictors of professional psychological help-seeking. *British Journal of Guidance and Counseling*, **22**, 207—217.
- Fischer, E.D., & Farina, A. 1995 Attitude toward seeking professional psychological help ; A shortened form and considerations for research. *Journal of College Student Development*, **36**, 368—373.
- Goodman, S.H., Sewell, D.R., & Jampol, R.C. 1984 On going to the counselor : Contributions of life stress and social supports to the decision to seek psychological counseling. *Journal of Counseling Psychology*, **31**, 306—313.
- Gross, A.E., Fisher, J.D., Nadler, A., Stielitz, E., & Craig, C. 1979 Initiating contact with a women's counseling service : Some correlates of help-utilization. *Journal of Community Psychology*, **7**, 42—49.
- Halgin, R.P., Weaver, D.D., Edell, W.D., & Spencer, P.G. 1987 Relation of depression and help-seeking history to attitudes toward seeking professional psychological help. *Journal of Counseling Psychology*, **34**, 177—185.
- 服部 環・海保博之 1996 予測・説明する Q & A 心理データ解析 福村出版 141.
- 星野 命 1970 感情の心理と教育(二) 児童心理,

- 24, 1445—1477.
- 石隈利紀 1996 学校心理学に基づく学校カウンセリングとは カウンセリング研究, **29**, 226—329.
- 河村茂雄 1999 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発(1)—学校生活満足度尺度(中学生用)の作成—カウンセリング研究, **32**, 274—282.
- Kushner, M.G., & Sher, K.J. 1989 Fear of psychological treatment and its relation to mental health service avoidance. *Professional Psychology : Research and Practice*, **20**, 251—257.
- Leaf, P.J., Bruce, M.L., Tischler, G.L., & Holzer, C. E., III 1987 The relationship between demographic factors and attitudes toward mental health services. *Journal of Community Psychology*, **15**, 275—284.
- 松原達哉 1998 異文化日本で学ぶ留学生のカルチャーショック 井上孝代編 多文化時代のカウンセリング 現在のエスプリ, **377**, 148—155.
- 松原達哉・石隈利紀 1993 外国人留学生相談の実態 カウンセリング研究, **26**, 146—155.
- 水野治久・石隈利紀 1999 被援助志向性, 被援助行動に関する研究の動向 教育心理学研究, **47**, 530—539.
- 水野治久・石隈利紀 2000 アジア系留学生の専門的ヘルパーに対する被援助志向性と社会・心理学的変数の関連 教育心理学研究, **48**, 165—173.
- 文部省学術国際局留学生課 1999 我が国の留学生制度の概要 受入れ及び派遣.
- Nadler, A. 1998 Relationship, esteem, and achievement perspectives on autonomous and dependent help seeking. In S.A. Karabenick (Ed.), *Strategic help seeking : Implications for learning and teaching*. Mahwah, NJ : Lawrence Erlbaum Associates, Inc. Pp.61—93.
- 西川正之 1998 援助研究の広がり 松井 豊・浦光 博 対人行動学研究シリーズ7 人を支える心の科学 誠信書房 Pp.115—148.
- Phillips, M.A., & Murrell, S.A. 1994 Impact of psychological and physical health, stressful events, and social support on subsequent mental health help seeking among older adults. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **62**, 270—275.
- Pipes, R.B., Schwarz, R., & Crouch, P. 1985 Measuring client fears. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **53**, 933—934.
- Rickwood, D.J., & Braithwaite, V.A. 1994 Social psychological factors affecting help-seeking for emotional problems. *Social Science and Medicine*, **39**, 563—572.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self image*. Princeton, N.J : Princeton University Press.
- Tijhuis, M.A., Peters, L., & Foets, M. 1990 An orientation toward help-seeking for emotional problems. *Social Science and Medicine*, **31**, 989—995.
- 浦光 博 1999 ソーシャル・サポート 中島義明・安藤清志・小安増生・坂野雄二・繁榎算男・立花政夫・箱田祐司 編 心理学辞典 有斐閣 541.

謝 辞

調査票に回答頂きました留学生の皆様には感謝いたします。また、調査にご協力頂いた、奥田沙織先生、秋庭裕子先生、高野靖子先生、西田弘次先生、栗田玲子先生、田所真生子先生に感謝致します。

本研究に際しまして、筑波大学心理学系助教授藤生英行先生、岩手大学教育学部助教授河村茂雄先生より貴重な助言を頂きました。ここに記して感謝致します。

(2000.5.8 受稿, 12.14 受理)

Sociological and Psychological Factors Relating to Preferences Among Help Providers of Asian International Students in Japan

HARUHISA MIZUNO (FACULTY OF LAW, HITOTSUBASHI UNIVERSITY) AND

TOSHINORI ISHIKUMA (INSTITUTE OF PSYCHOLOGY, UNIVERSITY OF TSUKUBA) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2001, 49, 137-145

The purpose of the present research was to investigate the effects of sociological and psychological factors on international students' preferences among help providers. 5 types of helpers were compared : international student advisors (professional helpers), Japanese language teachers and academic advisors (role helpers), and students from the same country as the respondent and Japanese students (volunteer helpers). For each type of helper, the Asian students were asked about academic, health, interpersonal, daily life and financial, and emotional issues. Questionnaires completed by Chinese, Taiwanese, and Korean international students studying in Japan resulted in 257 usable responses. The results showed that concerns about helper responsiveness were negatively related to preferences among helpers, whereas experience with actual supports were positively related to preferences. Self-esteem was positively related to preferences among help providers, and other variables such as gender and Japanese language ability were also related to preferences. The implications of these results for providing help for international students were discussed.

Key Words : preferences among help providers, helpers, helper responsiveness, self-esteem, international students in Japan